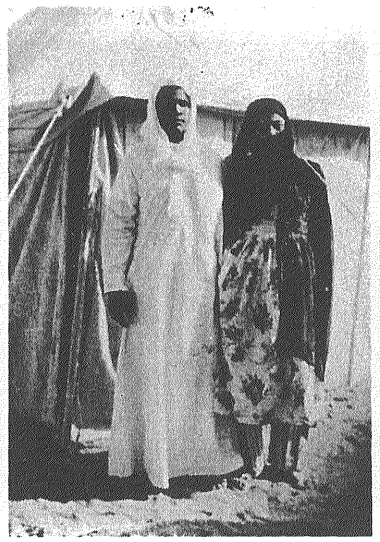
サウジアラビア王国紀行
～アラブの風習～

小村幸二郎

ベールの内側

おとぎの国　魔法の国とさえいわれてきた所だけにこの国へ行った直後は見る物聞くことすべてが珍しかった．　そうしたことの中には当然必要なのに　ちょっとまねのできそうにないことも多い．　その代表的なものの一つは挨拶の仕方である．　空港の待合室や町角などで　知人と握手をするのはわれわれとしても例外ではないが　大の男同士が抱きあって頬にくりかえしくりかえしキスをするのにはとてもなじめない．　しかしこれも日頃頭を下げて挨拶するよう習慣づけられているわれわれの目にそのようにうつるだけであって　生れおちて以来そのようにしつけられてきたこの国の人たちには抵抗感などあろうはずがない．

キャンプ生活が長びくと　同行の人夫や運転手たちは懐もさみしく　食糧やたばこなどもままにならなくなることが多い．　そうしたある日のこと　たばこをきらしてショゲかえっているベドウィン出身の人夫の１人にケントを２ハコやったことがあった．　この日はちょうど金曜日の休日なので　久しぶりに頭を洗い　ヘヤクリームを少し多目にすりこんでいた．　たばこをもらったその人夫は　感謝の意を表わす時や目上の人に挨拶する時に誰もがするように　いきなり私のオデコにロヅケしようとした．　しかし　これはたまらんと　その突出した口を一瞬にかわした私が下を向いたとたんに　人夫の口はみごとに　ヘヤークリームをすりこんだばかりの頭にペタリとくっつく破目になった．　その時　私はニタリと笑ったが　人夫の何ともいいようのない妙な顔はいまだに忘れられない．



第32図
ベドウィンの夫婦（加藤完氏撮影）この国では女性の写真を撮影することは非常にむずかしいがとくに親しくなるとまれには撮影を許してもらえる　奥さんはビニール製のサンダル　主人の履物は日本製のスポンジゾウリ

町を歩いていると　時折　真黒のマントのようなもの（アバヤ）を着て　黒いベールで顔をおおっている女性の姿をみかける．　夕暮れの露地うらなどで　突然　こういう姿にぶつっかると　何となく不気味であるが　こうしたこともほんのつかの間で　少しなれると　むしろそうした姿に出会うことを期待するようになりかねない．

しかし　同じ回教徒であっても　外国の女性は素顔を見せていることが多い．　イスラム教では「美しいものは人に見せない方がよい‥‥」といったことが　戒めの一つとなっているそうであるが　それにしても　真夏には50°C を軽く越える暑さの中を　黒衣で全身をおおってヒナタを歩くのは楽ではなかろう．　この国だけにみられるこの風俗　それは　今もなお　イスラムの真髄に生きんとするワハブ派に属するこの国では　当然なければならないことかもしれない．

ベールを通して見る女性の顔は　本当に　ぎくりとするほど美しい．　それなのに　なぜ　その美しさをかくさなければならないのだろうか．　女性の美しさを人に見せまいとすることが　宗教的戒めによるものとしたらそれは　美しい女性にまどわされがちな男に心の平和を乱さないため　ひいては男性と女性の心に平静さを失わせないために考え出された　悲しい知恵のなせるわざであろう．　われわれには考えもおよばないようなことではあるが‥‥．

砂漠に生きるベドウィンの女性がアバヤの下に着ているのは丈の長いワンピースのようなものとその下にはいているズボン下のようなものであるが（第32図）　ジェッダのような都会で裕福に暮しているであろうと思われる女性の多くは　アバヤの下に派手で丈の短かいワンピースを着　シームレスストッキングにパンプスか皮製のサンダルようのものをはいている．　そして高価な香水を含ませたその黒衣の下からさしのべられたふっくらした指先には真赤なマニキュアがなされていることが少なくない．　古くから自然に生きることを信条としてきたベドウィンと文明の風に当って生きる人との間には　わ

れわれの想像もおよばないような古い習慣に根をおろすこの国でさえ　はっきりした違いが認められる．　すけてみえるベールの奥にかくされた美しく化粧された顔やアバヤの下にのぞくワンピースは　きびしい戒律と習慣の中で息づく　精一杯の自由へのあこがれの象徴でもあろうか．　男性の目をさえぎる黒衣とベール．　そして　それは　女性にとっては　胸の思を打ち明けるべき術をはばむ一つの壁でもある．　恋愛の自由　若人たちの楽しげな語らいも　この国では　きびしい戒律の中に目の目を見ないものの一つでもあろう．

結　　婚

男性あるいは女性が結婚相手をどのようにしてみつけるかということはよくわからないが　何らかの方法で選ばれた女性が妻になるかならないかということは　どうやら　女性の父親の決断によるらしい．　そしてその結婚がまとまるかどうかは　当事者同志の意志にもよるのだろうが　だいたいは　男性側が女性側に（父親）渡す金額によって決まることが多いらしい．　もちろん　この場合　お互いの家柄その他が重要視される．　売買結婚といえば語弊があるかもしれないが　それに近い型式で結婚が成立していることがあることは事実のようである．　私たちの通訳をしてくれた男（第33図）の話によれば　彼が奥さんの父親に支払った金は10,000リアール邦貨にして80万円ということであった．　多くの人は売買結婚と聞くと　目くじらたてて怒ったり　いかにもやばん人だけがもつ風習のように思いがちであるが　一慨にそういい切れない．　早い話が結婚を取決めるための一つの条件とも目されている結納などというものは売買結婚の名残りのように思われる．　以前　九州の阿蘇地方には略奪結婚という奇妙な風習があったが　これなども現在の世の中では考えられないことだろう．

アラビアについて話をしていると「アラビア(回教徒)では奥さんを４人もっていいそうだ」ということを聞く．しかし　これは元々そうだったわけではない．　前にも述べたように　昔　アラブは戦いにあけくれていた．そして楽園を求めるために　祖国の隆盛のために　多くの人の尊い血がいたる所で流され　その残された妻や子はともすれば飢餓の境をさまよわなければならなかった．そうした頃　慈悲をモットーとするイスラム教徒は　次代を背負うべき子供（孤児）とその養育にたずさわる未亡人を救うため　真の慈悲とあわれみとによって　勇者の遺族の救済に立ち上った．　当時の世相やアラブのことについての知識の乏しい私には　真の理由はわかるべくもないが　多分　ゆとりのある人たちが未亡人を４人

第33図
Afmed Rafee
われわれの通訳として１年半を共にした　ものすごく頭の回転が早く　心臓の強さもとび抜けていた　中々のハンサムである

位づつ引き取ることによって　この人たちやその子供たちを救済することができたのではなかろうかと思える．そうした善意が　現在は世相の移り変りとともに「イスラム教徒は４人の妻をめとることができる」というふうにゆがめられてきているのではなかろうか．　しかし現在　４人妻の１人としてめとられることを望む女性がどの程度いるかということは私の知るところではない．

この目で見たベドウィンの結婚式風景を述べて　先へ進もう．

Al Wajh 地域でものすごい暑さと戦いながら調査を行なっていたある日のことであった．　同行のアラビア人が通訳のアフメッドといっしょに　私たちのテントにやってきて「今夜　テントの近くで　ベドウィンの結婚式があるから行こう」という．　一同　もしトラブルでも起こったら困るので　一瞬ためらったが「先方には話をしてあるから絶対大丈夫です」というアフメッドの言葉に　またとないチャンスだから行ってみようということになった．　この日は月の出も遅く星の光だけが妙に冷たい闇であった．　夜７時すぎ　食事を終えた私たちは30リアールを封筒に入れ　キャンプ地から６km ばかり離れた結婚式場へ向った．　ふだんは数家族しかいないこの場所に　今夜は 200 名ばかりが集まって　タキ火をしながらお茶をくみ　話に興じ　そして歌を歌っている．型どおりの挨拶を終った私たちは　砂地に敷かれたりっぱなジウタンに坐らされ　長老たちとお茶をくみかわし花ムコさんにお祝いの30リアールを渡した．　その時の花ムコや近親者たちの喜びようはたいへんなもので　見も知らぬ人間　そして遠い日本からのお客様からお祝いをもらうことなどは夢想だにしなかったことだろう．

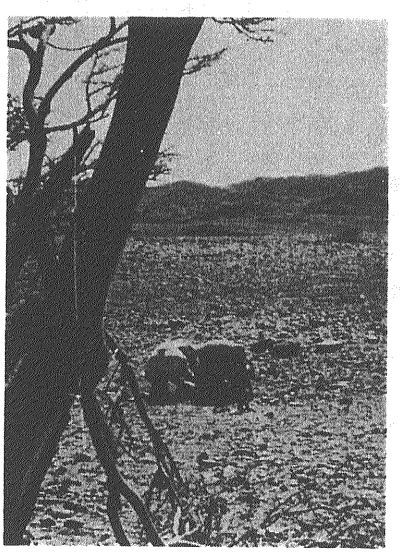
しばらくの間お茶をのみ　やがて長老にうながされてそこから40mばかりはなれた場所へ行った．　何しろ真暗なのでそこで何が行なわれているのか見当もつかなか

ったが　しばらくして目がなれてくると　その場所が結婚式場であることがようやくわかった．　二手に分れた男たちは手をつなぎ　時には手拍子をうって　お祝いの踊りを続ける．　間もなく　一瞬　水を打ったような静けさが訪れた．　何事だろうと思って　膝をのり出してみると　真黒のアバヤとベールで身をつつんだ女性がはだしで土をふみならし　身をくねらせて異様なおどりを始めた．　その時隣りに坐っていたアフメッドが「花嫁です」と耳うちしてくれたが　鼻をつままれてもわからない真暗闇で　黒装束に身をつつんだ女性の異様なおどりは不気味である．　夜もふけて10時近く　私たちは丸々とふとった羊を１頭返礼として受けて　その場を辞した．　時価10,000円位はすると思われるその羊は　あわれにも20時間後にはもうこの世にはいなかった．　そしてその肉は　ほとんど　人夫や運転手たちの腹におさまったが　よく考えてみれば「人の褌ですもうをとる」ということわざを地でいった人夫たち　まったく　うまうまとしてやられたわけである．　３日間にわたって行なわれた婚礼被露の宴　その後に訪れたのはもとの静けさのみであった．　今頃は祝福された２人は　ラクダをつらねて砂漠を旅していることだろう．

宗教即生活

この国の人たちが　イスラム教と密接な関係において生活していることは今さら述べるまでもない．　宗教即生活　信仰即行動というイスラム教徒のあり方がこの国の人たちの生活を形づけているといえよう．

日の出　12時15分　３時半　日没時　夜８時半　一日５回の礼拝（サラー）は　いかに暑かろうと　どこにいようと　メッカへ向って　忠実に行なわれる．　焼けつくような砂にヒタイをつけ　時には骨の髄まで凍るかと思われる寒風の中に立って　神に礼拝をささげる姿は神々しく　胸をうつものがある（第34図）．この礼拝の前には　一定の順序にしたがって水か砂でからだを清める．　これは私たちが神社や仏閣に詣でて手や口を清めるのに似ているが　ただ清めればよいというではなく　手　顔　頭　足など　定められた順序にしたがって清めなければならず　その順序を間違うと　はじめからやりなおさなければならない．　水の乏しい砂漠に興ったイスラム教なのに　なぜに貴重な水を一日に５回も礼拝するめに使わなければならないのだろうか．　一見矛盾したこのことも　よく考えてみれば　神に対する礼儀もさることながら　日頃からだを満足に洗うことさえままにならない砂漠の民であるだけに　最少限度に衛生を保つために生まれた生活の知恵のなせるわざとみられないこともない．



第34図
12時15分メッカへ向って礼拝するモハンムードとサウード（Wadi Tuffaya で）
いかに暑かろうと寒かろうと絶対に礼拝を欠かさない　この２人はとくに熱心であった
右足だけを爪先で支えているのに注意　前方の山は礫岩層
手前は河床堆積物

イスラム教やイスラム教徒に関する本を読んでいると「イスラムの５柱」と書かれているのがしばしばみられる．　これはイスラムの「行」における基本原則で　信仰の告白　礼拝　断食　喜捨　巡礼の５つをさす．　これらの中信仰の告白とは　イスラム教の標語ともいうべき「アラー　アクバル　ラー　インラー　イラハ　インラー　アラー‥‥」の聖句を信じきって　常に告白することである．　断食（ラマダン）は　イスラム歴（１年は354日で29日の月と30日の月が交互に繰り返される）の９月に　１ヵ月間行なわれる．　この期間中は日の出から日没まで一切の食物　飲物　たばこ等　一物たりとも　口に入れることが禁示されているが　病人　妊婦　軍人　船員　旅人等はその限りでない．　しかしこの期間中に断食をしなかった者は　正常の状態にもどった場合　たとえば旅行者の場合はその旅行が終った後に　断食しなければならないので　いずれにしてもイスラム教があるかぎりは例外なく断食をすることになる．　キャンプ中に断食に入った場合はたいへんである．　日没時のサラーが終ると　まるで餓鬼のように食い　一晩中さわいで夜中の３時か　３時半頃朝食をして日の出まで眠りサラーを終って　また横になり　７時か７時半に調査に出発するまで眠る．　そしてカンカン照りの中で仕事をする．　われわれは日常どおりに食事をし　夜は11時頃にはベッドに入るので　人夫たちの前でうまそうに食事をしたり　たばこをすったりさえしなければ　断食期間も苦にならないわけであるが　連中は日没後に食事した後　３時頃までドンチャンさわぎをするのでとても寝つけるものではない．

ただでさえ楽でないこのような土地で何を好んで断食などやるのかとわれわれには中々解せないが　これもよ

く考えてみれば　苦しさの故に神に頼り　ひもじさがゆえに神の恵みに感謝し　とかくだらけがちな気持を引しめる上において必要なことなのかもしれない．　きびしい試練に耐え抜いた後には１週間の休みがやってくる．そして人々は着飾り　うまい物を食い　町はひっくりかえりそうににぎわう（第35図）．そしてこの休みは　われわれ外国人にとっては　中近東の古い遺跡を訪ねるもっともよい期間でもある．　もし真夏に断食が行なわれるとしたらどうだろうか．　冷房装置のない屋内ですごさなければならない人たちにとっては　きっと　われわれの想像もおよばないほどの　苦しみであろう．　しかしいかに辛かろうと苦しかろうとそれに耐えなければならない．　イスラム教徒として砂漠に生きぬくために…．

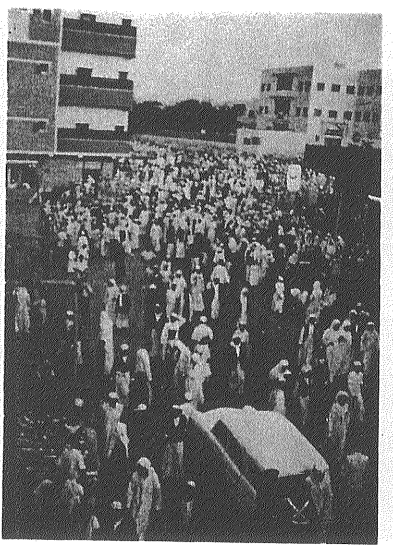
喜捨という行は　イスラム教にだけ特徴的なものではなく　他の宗教にもみられる．　これは　一口にいえば裕福な人が貧しい人に恵みをほどこすことで　本来は収入の何％かを喜捨するといった定めがあったが　最近はむしろ　自発的に行なわれている．　町を歩いていると身なりのよい人が　１リアール札などを　無造作に人にやっているのをみかけることがあるが　これなどは　喜捨の行ないが完全に身についているからであろう．　時には「バクシーシ」といって手を出す人もいるが‥‥．

イスラム教徒にとって　聖地であるメッカ（マッカ中心という意味）へ詣でることは　義務でもあり　一生の願望でもある．　そしてイスラム歴の12月には　各国から多くのイスラム教徒がこの国へきて　いわゆる巡礼（ハッジ）が行なわれる．　巡礼期間は１ヵ月であるが実際に要する日数は１週間位である．　しかし巡礼月近くになると　外国からは　現地の宿泊施設が十分ではないので　巡礼のはじまる１ヵ月以上も前にきてホテルで頑張ることも珍しくない．　昨年の巡礼では外国人が268,000人　現地人が800,000人メッカへ詣でたが　巡礼をすませて帰国するまでに要する日数と費用は莫大であり外国人のイスラム教徒の誰でもがメッカ参りをするというわけにはいかない．　最近のように航空路が発達しない頃の巡礼は　言語を絶する苦痛を伴った．「砂漠の舟」と呼ばれるラクダにゆられ　あるいは徒歩で　焼けつくような砂漠をわたって　メッカへメッカへと苦難の旅を続けなければならなかった．　そしてその旅はまさに死出の旅と化することも少なくなかった．暑さそして疲労にさいなまれながら遂に息絶える人も決して少なくなかったろう．　苦痛に顔をゆがめながら一歩でもメッカへ近づこうと努力しつつ死んでいった人たちの姿は崇高でもあり　そしてあわれでもあった．　しかし最近はメッカへ向う途中に死ぬ人はいなくなった．これも黄金の水と文明の利器のおかげだろうが　それでもメッカでの巡礼を終るまでに暑さに倒れて死ぬ人がいる．　いかにおのれの信ずる道のためとはいえ　その代償はあまりにも大きすぎるように思われるのだが‥‥．

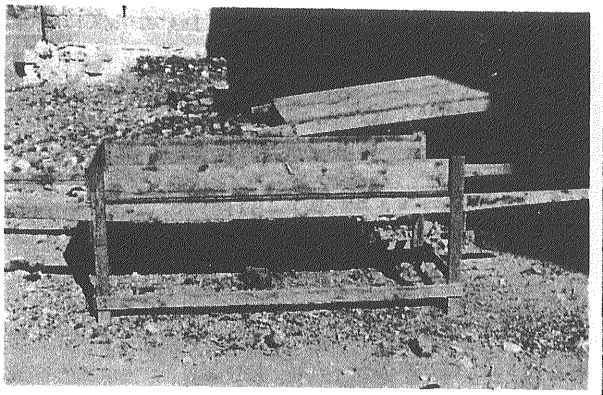
巡礼期間を終るといよいよ正月がやってくる．　そして１週間の休みを迎えると　人々は　口々に「コンロサナ　ワ　エンタ　タイープ（おめでとう）」といい交して　ニコニコ顔で新しい年を迎えるわけである．

イスラム教では　未来を肯定し　地獄と極楽があると教えている．　そして地獄における苦しみは現世における精神的苦悩　精神的堕落の反映であり　天国（極楽）は現世における精神的平和の延長であると説かれている．そして火葬された場合には　地獄へ行かなければならないと信じている人が多いようである．　したがって　この国では　火葬　水葬　風葬　鳥葬といったものはなくまず無条件に土葬される．　ジェッダ市内で　まったく遇然に　葬式の列を見たことがあるが　死体は　細長い矩形の棺に入れられ　４本の脚のついた台（第36図）の上にのせられて　上から白布でおおわれていた．　その後には　肉親や知人が　多勢列を作って歩いていたが僧侶もいないそして特別の物やお経らしきものもなく黙々と墓地へ向って歩くこの葬儀の列からは　その人の死を悲しむ様子はほとんど感じられなかった．　それがなぜだか私にはわかるよしもないが　もしかしたら　死をアラー（神）に召された幸福と思うせいかもしれない．

山峡の地をたどる時　見晴らしがよく　緑の見える地に　ベドウィンの墓のみられることがある（第37図）．そしてその墓には　死体の頭部近くに　細長い石が必ず立てられている．　何の変哲もないその石を見た時　異



第35図
正月休みのにぎわい　（Kuraysh Palace Hotel 横）断食や巡礼が終ると１週間の休みがある　この間市内は最高ににぎわい　夜の７時頃から12時頃まではまるで芋を洗うようである　そして街頭には　夜店が並び　子供のためにはインスタントブランコやシーソーができる　ブランコ代は１回（５分間位）８円である



第36図　棺をのせて運ぶ台（Bir Magrona の砦で）この台に棺をのせ4人でさげて運ぶが　時折休息できるように　4本の脚がついている

第37図　ベドウィンの墓（Wadi Mard の北方約80km）死体を埋めた所は少し高く砂礫がもられ　その周囲にはきれいな石（ここでは結晶片岩）が並べてある　死体の頭部は正しくメッカの方を向きそこには細長い石が立てられている

教徒の多くは　多分　気にもとめないことだろう．

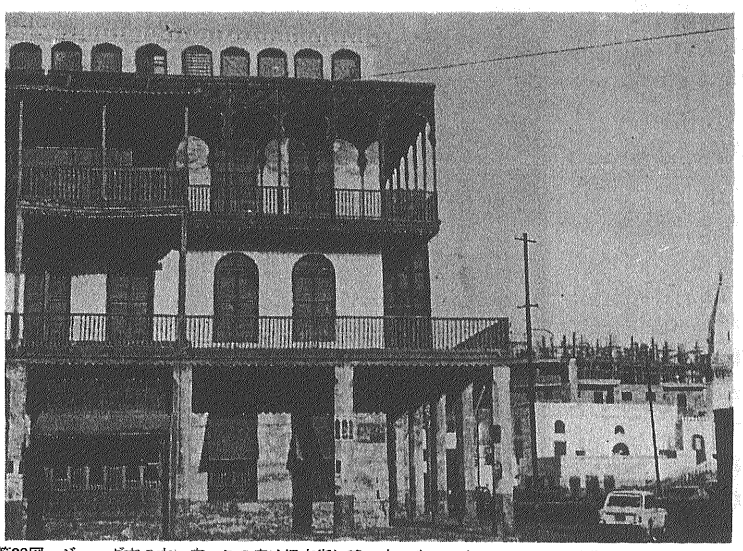
しかし　その石が　正しくメッカの方向を示していることを知ったならば　イスラム教徒の信仰即生活の実態により深い関心を抱き　そして敬意を表し　そこに眠る人の冥福を心の底から祈らずにはいられないだろう．

K 氏 の 家

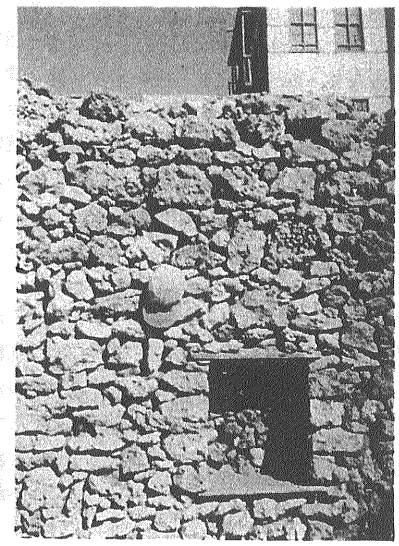
田舎の町やジェッダ市の裏通りなどを歩いていると30cm 単位に成形された珊瑚礁石灰岩を積み重ねて造った　古い家が目につく（第38・39図）が　これらの家を少しはなれた所から見ると　多くの家の表面が白い塗料で着色されているので　一見　鉄筋コンクリート造りの近代的建築のようにみえる．　そして　紺碧の紅海をへだててこれらの家並を見る時は　まさに　砂漠に浮かぶシンキロウとみまがうばかりである（第40図）．

家の内部は　そこに住む人の地位や貧富の差によっていろいろの点で異なっている．　私たちが招かれたK氏の家は　完全に洋式で　コンクリートの床の上にはすばらしいペルシアジウタンが敷きつめられ　壁には油の風景画がかけられていた．　広さ15坪位のその応接間には数10脚のソファが壁に沿っておかれ　アラビアの家にいることを忘れさせそうであるが　部屋の一隅におかれたシノシャ（水たばこ）がアラビアならではのムードをかもし出していた（第41図）．

ジェッダへ行って間もなく　サウジアラビア外務省に勤務する若い某氏の私邸を訪れる機会を得　家の内外をくまなく見せてもらったが　室内の装飾といい調度品といい実にりっぱなものぞろいなのに　びっくりしてしまった．　庭をいろどるマンゴの実　これも　水の乏しいこの国では　生活の豊かさを示すものであろう．　しかし自分の家を持たずアパート（第42図）暮しをしているいわゆる勤労者階級の人々がどのような調度品を用いどのような生活をしているかは　そのような家庭を実際に見る機会を得なかったのでわからない．



第38図　ジェッダ市の古い家　この家は旧市街に建つ古い家で　ウスマントルコ時代のものともいわれている　大部分は珊瑚礁石灰岩のブロックからなり　床・天井・柱等に木材を使用している　電柱の右側の建物は現在建築中のコンクリート造りのビル　右端の白い塔は寺院の尖塔（ミナレット）で右の方へ傾いており「ジェッダの斜塔」と呼ばれている



第39図　建築中の家屋の一部（Al Wajh）　真白の珊瑚礁石灰岩を積み重ね　所々に板をはさんで補強している　この家はいわゆる下層階級の人のもので石灰岩も整形されていない　ふつうはこの上に壁セメントを塗り　表面に

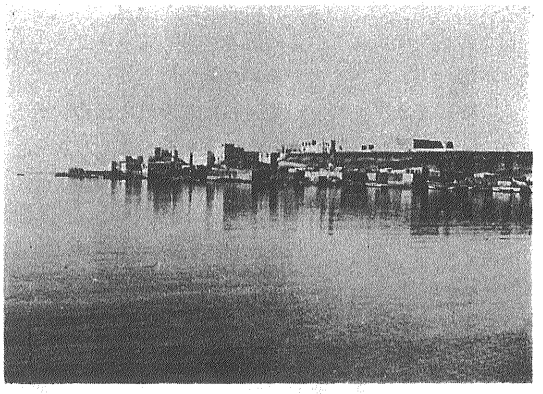
不 浄 の 手

見知らぬ土地へ行く場合　まず気になるのは気候風土や食物についてであろう．　もっとも最近は　旅行者の多い土地には　日本料理店や中国料理店などがあるので生水さえ飲まなければ　食生活にはそれほどの不自由を感じないでもすむことが多い．　しかし　ことサウジアラビアについては　やはり一応は気がもめる．

この国の人たちの主食は米(エジプト米　イタリア米)とうすく焼いたパンで　副食物は羊肉　魚　野菜等であるが　中近東一帯に共通な食物としてヨーグルトがある．そして特筆すべきものとしてはナツメヤシがあるが　これについてはすでに述べた．　ただ「一にぎりのナツメヤシの実と水だけで数日間も旅をすることができる」ということだけは書きとどめておく必要があろう．

以前はこの国の人たちは魚を食べなかったが　数年前からかなり多くの人たちの食膳に上るようになった．その料理法は　まず例外なく　油でカラ揚げしたものである．　サウジアラビアで日本食を食べることはまず不可能に近い．　しかし時には　ピチピチしたマグロやイカが魚市場で手に入るので　ショウ油さえあれば　日本で食べる刺身よりもうまい刺身が口に入るわけであるが何しろアルコール飲料を一切禁じている所だけに　いかに刺身がうまかろうと　ちょっと一杯というわけにはいかない．

これらのほか　海産物で日本人の口にあうものはカニとイセエビである．　イセエビは　サソリに似ているせいか　この国の人たちにはあまり好かれない．　そのせいでもなかろうが　Al Wajh 町から 40 km ばかり北方へ行った所の紅海の波打ち際などでは　闇夜にライトを



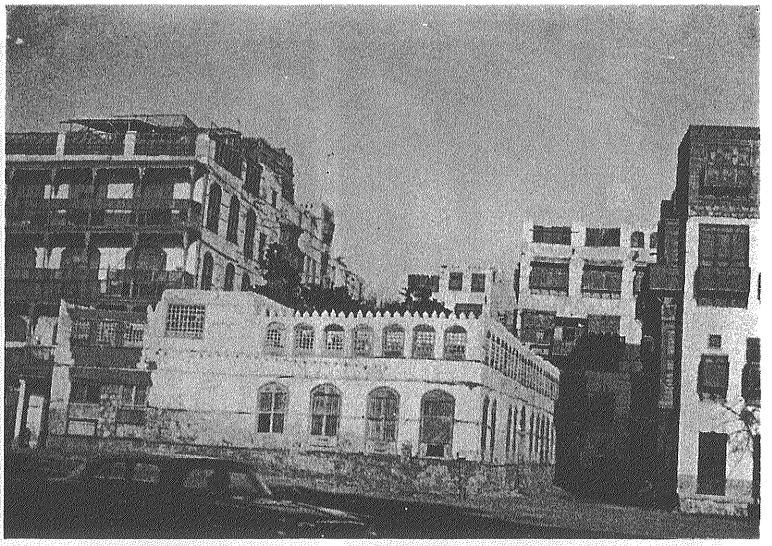
第40図　紅海をへだててはるかジエッダ市を見る

つけてヒザ位の深さの所まで入っていくと　大小好みのイセエビを思いのままに手づかみで捕えることができる．しかし魚類を捕えるためには　井戸水を汲む時と同様にその土地を治めている人の許可が必要なので注意をすることが肝心である．

アラビア料理の圧巻は　何と言っても　羊料理である．といっても　私たちが肉屋で買ってくる切りきざんだ羊とはちがって　大きな鍋の中に　皮をはがれ　内臓をとり出され　そして足首から切り落された羊が丸のまま入れられ味付けされたものである（第43図）．味は中々良く肉もうまいが　歯をむき出した頭がデンとのっているのをみると　はじめは何となく気味が悪く　慣れない間は食欲も半減する．

羊の肉は臭いとよくいわれるが　この国で食べる羊の肉は臭くもないし　牛肉と見分けがつかないことさえあって中々美味である．　そしてアラビア人がもっとも珍

第41図　K氏宅の応接間（Jeddah）　ペルシアジウタンと水たばこがアラビアらしいふんいきをかもし出している　水たばこ用のたばこは　ふつうのたばことは異なり　たばこの葉の粉末と蜂蜜・リンゴ・バナナ等を練りあわせたもので黒色のすばらしい香りである



第42図　ジェッダ市内のアパート群とモスク（寺院）　典型的なアラブ建築のアパートで4階ないし5階建である　中央部の2階建は寺院で　このような寺院は 100m か 200m おき位に建っており日没時には多勢の人が集まって礼拝を行なう　車はタクシーで　市内はどこまでのっても2リアール（160円）である

重するのは羊の脳ミソ（モッホ）である．　トーフと魚の白子の合の子のようなこの脳ミソは　時々ホテルで食べる料理の中にも入っているが　とくにうまいわけではなく　妙にブヨブヨしていて　私たちの口には合いそうにない．　脳ミソの効用はいろいろあるのだろうがそれが珍重されるのは　時には10,000円以上もする羊１頭にたった１つ　そしてほんのちょっぴりしかないということにもよるのだろう．

アラビア料理は総体的に薄味で少々甘味のあるものが多く　食後のデザートとして出されるホームメイドの菓子類にも　蜂密や砂糖をたっぷり使った　ものすごく甘いものが多い．　暑い地方では　たとえばカレー料理のように　辛口の料理が多いのかと思っていたら案外そうでもない．　もっとも　バンコックやジュネーブで食べたインドカレー（インド人経営の本場もの）もまったく辛くなかったから　暑い地方では辛い物を好んで食べるという私の先入観は誤ったものかもしれない．

食物に限らず　アラブの人たちが好んで飲む紅茶も相当に甘い．　なにしろ　器の底にべっとりとたまる位に砂糖がたっぷりと入っており　ふだんさっぱりした緑茶を飲みなれているわれわれには　甘すぎて　なじめない．

それも１杯か２杯かならがまんしてでも飲もうが　この国の人たちのように　５杯も６杯も　時には10杯近くも飲むなんて芸当はできるものではない．　こんなことを書くと怒りをかうかもしれないが　少々オーバーな表現をすれば「アラブの国に砂糖の生産や輸入が完全にストップしたら　そこの住民は　一夜にして　精気を失うかもしれない」　と思えるほどアラビアの人たちの砂糖の消費量はすごい．

この国の人たちの多くは　食事をする場合　ナイフやフォークを使わず　手で食べるが（第44図）　この場合必ず右手だけを使い　左手で食物を口に入れることはない．　このような習慣は　ナイフとフォークを使って食事する時にも例外ではなく　かりに左手にフォーク　右手にナイフをもって肉や魚を切ったとしても　食べる時にはフォークを右手に持ち代えてから食べる人が多い．生れおちて以来　右手だけで肉をちぎり　飯を口に入れる修練をつんだ彼らの手さばきは　まさに驚異であり　Al Wajh のプリンスが一握りの羊肉を右手で一ひねりして　ちょうど一口に食べられる大きさにバラバラにしたのを見た時には神業かと見まがうばかりだった（第45図）．せっかくある両手を使わず　不便だろうに　何を好んで片方の手だけを使うのだろうか？　こうした疑問は　イスラム教徒でないかぎり　誰もがもつだろう．

イスラム教徒の間では「左手は不浄の手」とされている．　その真の理由はよくわからないが　多分　次に述べるようなことにもよるのだろう．　食物について述べた直後に汚いことを述べるのははなはだ恐縮であるが　食後の排泄は当然の生理作用であり　事実を事実として述べるのは義務でもあると思われるので　あえて述べる．

イスラム教では　体内からの排泄物や嘔吐物で衣服やからだをよごすことをきつく戒しめている．　したがって　男でも　小用を足す時には　しゃがんで用を足しその後を小石で処置する．　またこの国の人の大部分は用を足した後　紙を使わずに　右手に水を入れた器をもち　その水を左手にうけてお尻を洗う．　このように書くと　中には　顔をしかめて「きたないな」と言う人もいるだろうが　われわれの習慣と彼らの習慣とでははたしてどちらがより清潔だろうか？

第43図　アラビア料理（K氏宅 Jeddah）手前の大きなナベに羊が１頭ほとんど丸のまま入っている　ナベの上端部にみえるのは肋骨

第44図　食事をする人夫たち（加藤完氏撮影）　金ダライ様の器に入れた焼飯風のものと　骨付きの羊肉を食う人夫たち　例外なく右手だけで骨をひきちぎり　飯をにぎりずし風にまるめて口へ入れる

アラブの掟

唯一の神アラーの思召しのままに生きんとするアラブは神の意志に反する言動をあえてしようとはしない．　神の意志に反する言動　それは理由のいかんを問わず　いついかなる場合にも否定される．そしてそれをあえてなした者に対する掟は　文明社会に生きる人々にはとても想像つかないほど　きびしい．　血を血で洗うごとき動乱の中に生きぬいてきたアラブは　それこそ　鰯には鰯　歯には歯を生きぬくための信条とした．

建国後わずかに33年を経た現在　その信条はなお消えうせてはいない．　われわれの身辺ではもはや見ることのできない悪へのむくい　そして現在　この国に生きている掟は　われわれにとっては驚異である．

喜びにつけ　悲しみにつけ　そして空しい心をいやすために飲む酒も　この国にいるかぎり　ままにはならない．　もし酒類を売買する現場を見つかった場合には無条件に6ヵ月の懲役刑と服役中月1度のムチ打ちの刑に服さなければならないし　飲酒の現場を見つかった場合には3ヵ月の懲役とムチ打ちの刑に服さなければならない．　そしてこれらの刑は　回を経るごとに　服役年数が長びくことになっている．　外国人の場合には国外追放になることが多いらしいが　いまだに密告制があるともいわれているので　注意が肝心である．

どこの国でもきびしい取締りの対象となっているマヤクの売買については　この国でもその例外ではなく　その現場が発覚すると　初犯で5年　再犯で25年　そして3犯では終身刑が言い渡される．

バクチが発覚した場合には　初犯が1年の懲役刑　以後は回を重ねるごとに刑期が1年づつ長びき6犯で終身刑となる．　したがって5犯を重ねた者は合計15年の服役である．　アラビアにはスリがいないということをしばしば聞くが　絶対にいないとはいいきれない．　スリをした場合にはまず無条件に手首から切り落されることになっているが　ジェッダ市内に　手首から先がない某国人がいることを見ても　きわめてまれにはスリもみつかるのだろう．　しかし　われわれは　時折大金をホテルの机の上に置き忘れたまま出勤したこともあったがなくなるようなことはなかった．

「鎖の大陸」という映画の中でもっともショッキングな場面は　多分　断首の刑の執行シーンであろう．　いわゆる首切りは　われわれの1年半の滞在中にも行なわれたが　この刑の執行は　理由のいかんをとわず人を殺した場合と姦通した男に対して行なわれる．　その場所はもっともにぎやかな場所であり　執行の時刻は　人通りのもっとも多い時である．　かつて外国の某会社の幹部が　国王に　「このようなむごい刑の執行を止めるよう‥‥」話したそうであるが　その時王は「うす暗い刑務所の中で　自分が犯した罪の意識にさいなまれながら苦悩の果てに死ぬのがよいか　どうせ死ななければならないのなら一思いに死んだ方が幸いか？」と逆に質問されたと聞く　そしてその人は　王の質問に対して　即答し得なかったそうである．

大罪を犯し　いずれは死ぬべき運命にある罪人にとって　果たして　どちらがよりしあわせであろうか？　もちろん私にはわかろうはずはない．　こうした刑罰がいつ頃から行なわれていたかということについてはよくわからないが　紀元前18世紀の頃権勢をほしいままにしたハンムラビ王の法典に「患者を死なせたり失明させたりした医者に対して　罰として　両手を切断する‥‥」むね書かれているところからみれば　かなり古くから施行されていたのであろう．　こうした刑罰の基礎となっているものは　やはり　目には目　歯には歯という思想のようであるが　こうした刑の執行がこの国から消え失せるのはいつのことだろうか．　人心を惑わせ　人を傷つけたことに対する当然のむくいがこのような刑罰であるとしたら　ここしばらくはなくならないように思えるのだが‥‥

（筆者は鉱床部　現在サウジアラビア国へ出張中）

第45図
Al Wajh のプリンス主催の昼食（Wadi Hamalya）河床堆積物の砂礫の上にジウタンを敷き　アラビア料理を賞味した　前列左から　小村・プリンス　一人おいて奥海・磯・畠中・桑形　後列左半分は従者たち　右半分はわれわれが使った人夫や運転手たち　後方の山は meta-basalt